

# きょうな (みずなの小株づくり)

アブラナ科：日本

## 栽培暦

月 旬	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主 な 作 業	冬播き (ハウス) ● → ■ (生育目安70~80日) ● → ■ (生育目安50~70日)																																			
	春播き (ハウス) ● → ■ (生育目安50日) ● → ■ (生育目安35日)																																			
	夏播き 播種 ● → ■ (生育目安30日) 収穫 ● → ■ (生育目安25日) ● → ■ (生育目安30日)																																			
	秋播き ● → ■ (生育目安35日) (生育目安60~70日) ● → ■																																			
	晩秋播き (ハウス) ■ — ■ (生育目安70~90日) ● → ■ (生育目安70~90日)																																			
	●																																			

### ■栽培のポイント

1. 冷涼な気候を好み、生育適温は15~23℃で低温と乾燥に強い。
2. 25℃以上の高温に弱く、ウィルスの被害を受けやすく、作柄や品質も不良になるので、秋播きが一般的である。
3. 発芽が一斉に揃うと、収穫も一斉に出来、作業効率が上がる。播種後の水管理に注意。

■品種 早生千筋京水菜 (小株どり)。

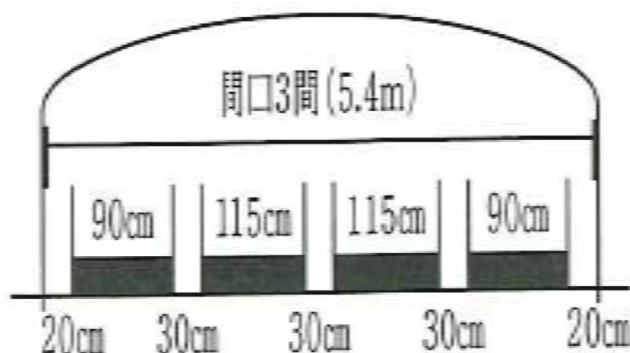
■種子量 (1アールあたり)

直播の場合：20~30ml (8,000~12,000粒)

シーダーテープの場合：約500m

■播種準備 栽植密度

パイプハウス栽培例



## ■本畑の準備

2～3作分として完熟堆肥を10a当り2～3tを投入する。

## ■施肥

### 施肥例

(a当り)

肥料名	基肥	追肥	備考
完熟堆肥	300kg	—kg	} 窒素 1.1kg 成分量 磷酸 2.0 加里 1.0
BMようりん	6	—	
消石灰	12	—	
MMB14号	8	—	

## 栽植様式と必要種子数

(100坪当たり)

間口	外ベッド	外条数	内ベッド	内条数	条総数	シーダー長	本数
3間	90cm	6条×2	115cm	7条×2	26条	1,530m	21,857
3間半	90cm	6条×2	160cm	10条×2	32条	1,600m	22,857
4間	120cm	8条×2	175cm	11条×2	38条	1,672m	23,885

冬場は、サイド側とベッドの隙間を50cm位とり、条数を減らす。

## ■播種

播種機（ごんべえ等）を使った直播：株間7cmにセットし、条間15cmで播種する（覆土がうすいことを確認）。

シーダーテープ利用の場合：株間7cm、一粒のシーダーテープを利用する。

- ・冬場など、大株になる場合は、株間5cmにする。
- ・調整労力（袋詰め）は、1人で1日10箱（約40kg）程度が目安。1作の収穫始めと収穫終りの期間が3日程度（夏場は短くなる）であれば、1回の播種面積は労力1人につき30坪程度となる。その点を考慮し順次段播きするように計画的な播種を心がけている。
- ・播種後は、十分にかん水する。かん水が不十分だと発芽が悪くなる。

## ■病虫害防除

- ・病害では白さび病、害虫ではアブラムシ、ヨトウムシが発生しやすい。
- ・ウィルス（カブモザイクウィルス・キュウリモザイクウィルス等：アブラムシ伝搬）発病株は見つけ次第抜き取り処分する。

## ■栽培管理

### 【かん水】

- ・発芽後は、地表が乾いていたらその都度かん水を行う。本葉1～2葉まではかん水を控え、立枯病や徒長を予防する。

- ・一度に多量のかん水を行うと、根をいため、病気や徒長の原因となるので注意する。
- ・かん水チューブを使用することで、土の跳ね返りを少なくし、汚れにくくなったり、病気にかかりにくくなる。
- ・収穫時に水分が少なすぎると日持ちが悪くなる。多すぎると収穫時や輸送時に葉折れの原因にもなり、腐敗に直結するので、収穫予定の 10 日前にはかん水を控えて（土畑では水切りをする）、色上がりを良くし、収穫時の葉折れやトロケを防止する。

### 【夏場の管理】

- ・生育後半にハウス屋根に遮光ネット（シルバー）をかけて、できるだけ涼しく管理する。  
目安：7月～8月期、40～50%程度の遮光
- ・収穫・調製・出荷作業に労力がかかり、かつ春夏期は草丈の伸びが早いので、収穫が遅れないよう計画的に播種して、収穫のピークをなだらかに連続して出荷できるようにする。

### 【冬場の管理】

- ・発芽しやすいように、暖かい時期を選んで播種する。
- ・発芽後、5℃以下の温度で15～20日で花芽分化するので、12月～2月の播種は、べたがけ、ビニールトンネルで保温に努める。
- ・収穫期が1～2月の場合は抽だいの可能性は低いものの、3月の収穫は花芽分化による抽だいの危険もあるので、計画的な収穫に努める（天候を予測して、暖かい日が続くなら早めの収穫も考える）。

### ■収穫・調整

- ・草丈27～32cm、1株40g程度（M規格です）を目標に収穫する。
- ・根を切って土を払い、黄色くなった下葉や子葉、虫食い葉、枯れ葉などを除去し、重さを計り階級ごとに選別する。
- ・階級別に秤で計測し、210g皆がけで袋詰めする。
- ・袋詰めの際は、筒状の袋詰め容器などを利用すると便利。
- ・収穫後は、急速に品質が低下しやすいので、調整・袋詰めはすみやかに行う。
- ・水洗いは腐敗など品質低下の原因となるため絶対行わない。
- ・規格ごとに、200g束袋で20袋入れを1箱とする。

### ■後始末と次作の準備

- ・収穫終了後、かん水チューブや残さ等を取り除き耕起する。
- ・真夏の場合は、ほ場にかん水し、ビニール等で覆っての太陽熱消毒も有効である。
- ・土壌分析（残渣確認）を行い、施肥設計による追肥と、次の播種を速やかに行う。